

シリーズ

葬送儀礼の問題を考える



第2回 中陰の「三月がかり」を避ける習慣

□ 儀礼の意味あい、 説明のむづかしさ

前回（『宗報』二〇一〇年八月号）の最後では、さまざまな成り立ちを持つ葬送儀礼を考える際の論点として「①真宗教義によって、後付けの解釈が可能な要素／②明らかに、真宗教義に反する要素／③真宗教義では説明ができない要素」の三つを挙げ、特に③の扱いが大きな課題であると提起しています。

『葬儀規範』解説書の冒頭には、儀礼を生み出し、そして変化させる背景について、「教義」「教団」「信者の思い」の三者が重要な役割を果たすことが述べられています。今日、私たちが葬儀の現場でとりおこなっている数多くの儀礼は、実に幅広い時代と地域の中でその三つの

要素が複雑にからみあいながら成立したものです。そして、その中には儀礼を生み出した背景すら忘れられてしまい、全く別の意味づけがなされているものも決して少なくありません。また、前回もふれているように、葬送儀礼は各地の地域共同体によって担になわれてきた歴史があり、地域独自の様式と多様な意味づけが行われています。したがって、「なぜこの場面でこの儀礼なのか」「この儀礼にはどんな意味があるのか」という問いに答えていくには、こうした儀礼の成立と変化のプロセスを一つ一つ丁寧ていねいに解き明かす必要があります。それは容易ではありません。そして、もし仮に一つの儀礼の意味あいについて、学問的に説明がついたとしても、葬送の現場における遺族の思いに對し、その合理的解釈がはたしてどれほど共感を得られるのでしょうか。

□ 中陰の「三月がかり」を避ける習慣

今日の葬送では、中陰（四十九日）の期間が三カ月にまたがる場合、翌月末に満中陰法要をつとめ、中陰を短縮する習慣がかなり広まっています。門信徒から「中陰の三月がかりを避けたい」との申し出があつた場合、現場の僧侶は「それは迷信ですから気にされないように」とか「始終苦が身につく（四十九が身に月）という単なる語呂合わせですから、浄土真宗では特にこだわらない方がよいのでは」と婉曲に正規の日程で中陰をお勤めするように勧めるケースが多いのではないのでしょうか。しかし、これでは、儀礼の意味あいの合理的説明にもならず、まして「これ以上苦しみが重なってほしくない」という遺族の心情をくみとることにもなりません。

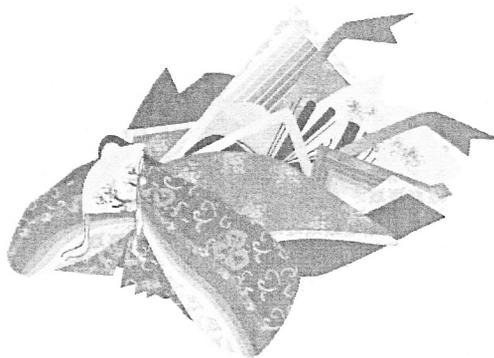
仏教史学者の中井真孝氏は、室町時代の將軍の中陰について記した貴族の日記

に、すでに中陰の「三月懸がかり」を避ける文言があることを指摘し、その背景には、「月の朔日または晦日の行事を二回も続けて止めることが出来なかつた」当時の官僚たちの事情があつたのではないかと推察されました（『読史余語』五頁、二〇〇三年、私家版）。つまり、中陰の「三月がかり」をばか風潮の根源は、死の忌を三十日とする仏教受容以前の習俗（「延喜式」と、仏教の四十九日の儀礼との整合性を持たせるためではなく、「服喪」による公務停滞を最小限に止めたいという世俗の論理が働いていたのかもしれない）です。そして、この中陰儀礼の短縮が次第に流布していくにつれ、中陰の元来の意味が忘れられてしまい、「始終苦が身につく」という語呂合わせが生まれたのでありましょう。まさにこれは、儀礼の非仏教（真宗）的見地よりの後づけの典型ではないでしょうか。

□ 合理的説明から

遺族の心情へ寄り添う姿勢へ

ところで、肉親を亡くした直後の近親者に対し、こうした儀礼の成立と変遷についての合理的説明は、どのように受けとられるのでしょうか。私の拙い経験では、論法が理路整然として説得力が強ければ強いほど、逆に遺族の方々は「思いを受けとめてもらえない」ストレスと、ひいては僧侶への距離を感じるにちがひ



ありません。

やはり遺族の心情に寄り添うためには、「わかった、理解した」という次元ではなく、心の底からともに感じあえる世界がもとめられるでしょう。そのためには、遺族の思いを徹底的に聞かせていただくことや、何よりも日頃の信頼関係が必要なはいうまでもありません。そのうえで、逆に「始終苦が身につく」という後付けを手がかりにして、「仏教は苦しみから逃れるの^{のが}ではなく、苦悩の中で真実にめざめる教えです。私たちが身近な人の死にであうことによって、改めて気づかされたことがあったと思いません。今まで他人事として避けてきた死、それを身近に経験した時、私たちは大切なことにめざめさせられるのでは」と語りかけるのも、一つの共感への道ではないでしょうか。

葬送の現場で行われている多様な儀礼の意味あいに関しては、単にその成立と変遷を客観的に説明するだけでなく、それを遺族の心情と何よりも私自身の問題

として、どのように受けとめていくかが肝要であるといえましょう。

（本願寺仏教音楽・儀礼研究所
委託研究員 直林不退）

※タイトル部分の図は徳力善雪作「親鸞
聖人絵伝」第八幅（本願寺蔵、部分）。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所
ニューズレター第13号『仏教儀礼』
最新号



（頒価無料）

教学伝道研究センター

TEL 075-371-9244
FAX 075-371-5761

- ◇本願寺茶房
天岸浄圓師一後編
- ◇儀礼しています
一宗派を超えた大遠忌法要
- ◇タイムスリップ大遠忌
一江戸時代編
- ◇行ってきました
“親鸞さまの道”